



第二号 平成30年5月1日 きものいろいろ

No. /

二月十二日 京都 三木城の南にある 末
 末皇園の卒業式に出席した。
 会場の 卒業生は 卒業生。後半は 生
 母の父兄。
 ソックスもまきの。まつと 早くから ハー
 メイリ 着付けをして来たのだろう。
 卒業生の姿も 多様だ。振袖・訪問着。
 訪問着に 袴・振袖に袴。残念ながら 振袖
 の上に袴をつけて。セウククの振袖の上等
 のもようが見えなくて惜しい。
 父兄達もほとんど きもの。訪問着や色
 無地。
 一年生の時は 足袋とけく。大変だった。
 生母達が 正装の着こなしで 別人のようだった。
 袴の姿も いろいろ。大和和紀さんの 袴は
 いかにもかっこよくて 主人の 袴姿が
 大きな涙を 作った。
 きこやんは 十一年 自由な着こなし
 で いろいろするものがあつた。
 振袖を着て 袋帯と草結した 片方

きものいろいろ
 市川りょう

三月十二日、京都。二条城の南にある未来学園の卒業式に出席した。

会場の前半分は卒業生。後半分は生徒の父兄。

いずれもきもの。きっと 早くからヘヤーメイク、着付けをして来たのだろう。

卒業生の装いも 多様だ。振袖、訪問着。訪問着に袴、振袖に袴。残念ながら 振袖の上に袴をつけると、せつかくの振袖の上前のもようが見えなくて惜しい。

父兄達もほとんど きもの。訪問着や色無地。

一年生の時は、足袋をはくのも大変だった生徒達が、正装の着こなしで 別人のようだ。

袴の色もいろいろ。大和和紀さんの『はいからさんが通る』で、主人公の袴姿が大きな流れを作った。

きこなしは、この十年 自由な着こなしでびっくりするものがあった。

振袖を着て、袋帯を前結びにしたり、片方の袖を通さず、肩抜きにしたり、帯あげのところにミンクをはさんだり。しかし、この二～三年で着こなしも、伝統的なものとなり、品の良い きものもようが見られる。

学園に入学した頃は、足袋もはけなかった人達も、今日の卒業式には、振袖をきっちり決めて、にこにこ笑顔。

日本人は、冠婚葬祭を 守り 伝えている。

お宮まいり、七五三、十三まいり、成人式、結婚式、葬式。日本に伝えられた通過儀礼を見ると、人生のふし目ふし目に 衣を正し、手をあわせて来たのだ。

式典が終わって、ほっとしたのか、にぎかなおしゃべり。

お互いのきものや帯の話題。

こうして、この子達も大人の仲間入り。成人式も二十才から十八才に変わる。

これからは、自分の作る人生だ。

ふと見ると袴姿の生徒の足首が黒いスパッツ。

足袋の上から黒いスパッツがのぞいている。これはまずい。

階段の上り降り。車の上り降りに必ず見えるので、下着はひざまで、ひじまでと気をつけてほしい。きものを着た時は、いつもあなたが主役だ。